

令和5年度仙台市若林区まちづくり活動助成事業

質疑応答及び評価委員長総評

《報告の流れ》

1 団体 8 分で発表。1 団体ごとに評価委員による質疑をし、最後に評価副委員長（委員長代理）から総評を得る。

連坊オモシロ街あるき

連坊商興会青年部

Q 収支決算書で金額未定の項目があるがどういうことか。

A 動画の編集に係る謝礼を含め、これから発生する費用については未定と記載した。

意見 → 助成開始時期と比較して、映像の勉強をされ、パワーポイントの発表も工夫されている印象を受けた。助成から3年の経過を経て、今後は、区外の人や学生を巻き込んでイベントを行うという構想が話し合われていることについても非常に素晴らしい。また、メンバーの方々が非常に歴史好きであり、その造詣の深さに驚くとともに、それを多くの方々に伝えていただきたい。

Q 今年度の事業で、植物観察会や東北学院大学と連携して防犯部街あるきをした趣旨を教えてください。また、映像や写真の撮影会をした際の資料があれば確認したい。

A 映像や写真の撮影会については、法運寺から正雲寺にかけて街あるきをしながら写真を撮影した後、コミュニティセンターで各々の参加者が撮った画像を見ながら、講師から全員にアドバイスをいただくという企画。それにより、連坊の自然や歴史をそれぞれの視点で表現していただき、魅力に気付いてもらうという趣旨であった。本来は動画を作りたいかったが、そこまではいかなかった。

植物観察会については、鳥の目から見ると、連坊はお寺が多く、自然が多い街である。植物もとても多いので、様々な街歩きのコースが発見されるのではと考え企画した。ガイドの先生が面白く、50mしか歩いていないのに、30分も経ってしまう程、様々な話を聞いた。今年も行う予定である。

東北学院大学の防犯部と連携することとなり、「まずは連坊のことを知ることから」という趣旨で街歩きを行った。街を歩き、歴史を教えていく中で、学生から「連坊って面白いところですね」という感想をいただいた。今後も学生と連携を進めていきたい。

Q 当初、既存の居住者だけでなく、新規居住者も巻き込んだコミュニティづくりをしていきたいと目標を掲げていたが、連坊オモシロ街あるき会発足に伴い、当初メンバーと新しくメンバーとなった人数の内訳はどれくらいか。

A 地元の方は1割程度。メンバーの目標は50人だが、まずは12人、15人、20人程度で始める予定。

意見 → 来年度13のプログラムを既に企画されているが、無理のない範囲で是非続けていただきたい。

あらい七夕プロジェクト

あらいフェローズ

- Q 協力していただく企業が増えたということだが、それは金銭面か、もしくは物の提供であったり、人であったり、具体的にどのような協力だったのか。
- A 企業からの協賛金が昨年より増えた。他にも、飾りづくりの協力や夏祭り当日のお手伝いなど、人の面でもご協力いただいた。
- Q 協力いただいた企業に対するメリットはあるか。
- A それは反省会の中で出た課題であり、来年度は祭りの中で協賛いただいた企業をPRしたり、紹介することを検討している。
- Q 夏祭りの広報の仕方、工夫について教えていただきたい。
- A 本夏祭り自体まだ2年目が終わったばかりであり、いきなり荒井地区全体を巻き込むのは難しいと考え、まずは荒井東地区の皆さんと協力していこうと決めた。また、思いとして、同様の地域課題を抱える七郷地区の皆さんと手を取り合い、横の繋がりを作っていききたいので、七郷地区全体で配布されているミニコミ誌で情報を発信した。夏祭りの広報は荒井地区以外の方にも来ていただき、SNSを使って発信した。
- Q 制作した「おまつりの歌」と「動画」が地域に浸透している手応えはあるか。
- A おまつりの歌は荒井駅が仙台海手の玄関口であることから、海を意識し、海辺の活動を伝えるような要素を入れた。具体的には、海の廃材とか廃品を使って楽器を作成した。その楽器で作った歌を地域の合唱サークルの方と一緒に、荒井駅のメモリアル交流館でミニコンサートをしていきたいと考えている。動画についてはDVDを100枚作成し、夏祭りにご協力いただいた皆様に配布したので、歌や動画のアイデアをいただきながら、今年の七夕飾り制作のお願いをしていきたいと考えている。
- Q 民生委員の方と独居の方が繋がりを作れたことは非常に重要なことであるが、新しく移り住んで来た人たちの活動への参画について、工夫があれば教えていただきたい。
- A 荒井地区で今急激に増えている世帯層が20代から40代であり、子育て世帯の方がとても多い。そのため、子供たちをターゲットにして、ミニコミ誌の市民ライターや、夏祭り当日にステージでアナウンサーを体験するなど、ちょっとしたアクティビティを七夕飾りづくりの中に投入し、お父さんお母さんにも見てもらえるような機会を作りたい。

仙台屋台を活用した「沿岸部の魅力を発掘・発信する」プロジェクト

株式会社めぐみキッチン

- 意見 → 活用事例を見せていただき、屋台が一つあるだけでアイキャッチになるというか、アイコンになるというか、存在感もあり、可能性を改めて感じた。連坊のおもしろ街あるきや荒井の夏祭りや、コラボしても面白いのではと感じた。是非、社会実験的に幅広く実施して欲しい。
- Q 震災前に荒浜の地域住民が元旦に甘酒をおふるまいしていたことを再現し、無料で甘酒を提供する取り組みは大変素晴らしいが、今後事業を継続していく中で、収益を上げる取り組みが重要であり、調理した物をその場で提供していくことは難しいと思うが、何か工夫していることはあるか。
- A 飲食の提供は制限が多く、その良さを引き継ぐのに苦勞しているが、キッチンカーがあればできることも増えると思うので、検討していきたい。
- Q めぐみキッチンは荒浜の事情、農業のことなど地域に精通している中で、コンテンツとしてのトークイベントをどのように豊富化していくか、来年度のプログラムやイメージがあれば教えていただきたい。
- A まだ構想段階だが、屋台を茶席に見立て、そこに主人がいて、お客さんがいて、荒浜の食材を使った料理でおもてなしをする。トークの区切れで荒浜の食事が運ばれて来て、その食材について話しながら食べる。そして、掛け軸になるのが深沼の海だったり、貞山運河であったり、それを題材にして、お話しするお客さんに合わせて場所や掛け軸が変わる。そのように、屋台を茶室に見立てたトークイベントを企画し、来年は収録、発信していきたい。
- Q 屋台の良さは、屋台の中にいる人と外で囲んでいる人が同じ目線で話ができることが素晴らしいと改めて感じた。トークイベントに是非期待したい。移動は大掛かりだが、トラックか。
- A 距離にもよるがトラックでも移動するし、深沼と拠点である荒浜ベースの距離であれば手で運んでいる。汗だくになりながら引くこともあるが、それはそれで面白い風景だなと感じている。最初に積載車で屋台を運んできたので、街中にも運ぶことができる。
- Q ワークショップで参加費を徴収しているがこの理由を教えて欲しい。
- A 参加費はお昼を提供する食材費や保険代に充てているが、今後、この事業を継続していく中で、どの程度の参加費でどの位のサービスが提供できて、どれくらいの費用がかかるかなど、勉強中である。
- Q 修繕をする際に、例えば、電飾を付けたりすると雰囲気壊してしまうこともあると思うが、工夫していることはあるか。
- A 物で言えば、カウンターテーブルや柱、剥き出しになっている箇所や躯体は修繕する。一番大事にしたいのが、屋台を取り囲んだ写真のように人間の関係性は絶対に保存していきたい。歴史が詰まっているので、手に近いところ、目に近いところは基本的に残しつつ、劣化しているところを修繕している。
- Q この屋台が荒浜にどのような効果をもたらしていると考えるかお聞かせ願いたい。
- A 屋台に人が集まってくるので賑わいが生まれ、その集りに更に賑わいが生まれるなど、人を集める効果は高いと感じる。それと、荒浜の住民がいつも来るたびに「ここでお酒飲み

たい」と、昔を思い出す方がいて、屋台と言えばお酒なので、屋台を懐かみ、楽しめるようなイベントを企画していきたいと考えている。

2023 せんだいわらアートフェスティバル

せんだいわらアート実行委員会

- Q わらで作ったオブジェは展示が終わった後はどうなるのか。
- A せんだい農業園芸センターで飾っていた大型のわらアートは 12 月までの展示期間が終わった後にわらを剥がし、焼き芋をして活用したり、農家の方にお譲りし、わらマルチとして活用されています。
- Q わらはどのように作られて、使った後どうなるのか、伝えていく取り組みはしているか。
- A オープニングイベントでは、ReRoots のメンバーが来場者に向けて、わらアート制作の目的を説明した。
- Q わらは雨に濡れると傷むのではないかと思われるが、メンテナンスはなく、そのままずっと展示が可能なのか。
- A 大型のわらアートに関しては、外に展示しているので雨風で一部剥がれてしまったり、風化してしまうことがあるため、定期的に様子を見に行き、付けなおし作業を行っている。見に行けない時は、せんだい農業園芸センターの方からご連絡をいただき、手が空いた時に直しに行くようにしている。
- 小型のわらアートであれば、雨風の当たらない屋根がある場所に展示するようにしているが、屋根のない場所に展示する時は、それもまた様子を見に行ったり、展示先の事業者の方に協力していただき補修している。
- 意見** →大変有意義な取組であるし、人が訪れるきっかけは確実に作れているという力強い言葉を述べられている中で、当該助成金だけでなく、他の団体からも助成を受けて、1つの施設（せんだい農業園芸センター）の集客を上げているということが気になる点である。開催する場所からも金銭面の負担をいただいた方がバランスがよいのではないかと。
- Q 事業内容の中に「沿岸部の事業者との関係づくり」や「回遊性の形成」と記載があるが、具体的に出張わらアートや回遊性の形成について教えていただきたい。
- A 出張わらアートとして、フルーツパーク、メモリアル交流館、七郷小学校などに展示をさせていただいた。また、しめ縄飾りのワークショップを開催し、作った物をアクアイグニスで販売なども行った。他にも「わらなう体験」や「輪通しづくり体験」などメモリアル交流館や荒井児童館でワークショップを開催した。
- Q アクアイグニスやフルーツパークと連携し、どのような感触を得たか。
- A アクアイグニスからは小型のわらアートの展示依頼があり、地域外にも魅力が伝わっている印象がある。
- Q 大型わらアートの展示で他事業者と連携することは難しいか。
- A 大型のわらアートだと移動が難しい。小型のわらアートだとインパクトは小さくなるが、トラックに積んで運べる。発信力は高いので、今後は連携した取り組みをしていきたい。
- Q スタッフの中で、わらアーティストのような方はいるのか。
- A 基本は学生が制作しており、代々先輩に教わりながら継承されている。

新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、本格的に外に出たり、マスクなしで外でイベントをしたり、日常が少しずつ戻ってきたことが、令和5年度の事業の大きな特徴の1つであったと感じている。

この助成金はまちづくりをテーマに活動団体を集めており、地域毎に課題は多様だなということを感じた。その中でも、大きく3つの点で感じたことがあり、お話しさせていただきたい。

1つ目は各団体で、「コミュニティ形成」や「コミュニティを創出する」といった、「コミュニティ」の言葉が使われていたが、それぞれの団体によって、コミュニティが具体的に何を指すのか異なっていた。その中身を精査しながら、コミュニティを作っていく、コミュニティを再び形成していく、ということを経験として適切に使っていただきたい。

皆様が実感されているように、コミュニティを作ることは非常に難しいことである。連坊オモシロ街歩きに関して言えば、新しく街が変わろうとしている中で、元々住んでいる方と新規住民をどう繋いでいくか、まさに新しくコミュニティをどう作っていくかである。荒井フェローズは、劇的に荒井の町が変わろうとしている中で、これからのコミュニティとは何かということと共に考える場としてのお祭りだと感じた。仙台屋台を活用したプロジェクトでは、コミュニティがなくなってしまった場所で、どのようなコミュニティを作り上げていくか、わらアートに関しては、そこで鑑賞して楽しむその先、わら文化をどう伝え、元々そこにあった農村コミュニティの素晴らしさをどう伝えていくかということを経験を軸に課題を捉えて、そしてそこに向かっていこうとしているのが、本当に素晴らしいことだなと感じた。

しかし、ややもすると、このコミュニティというわかりやすい言葉に活動がどんどん収束されていき、分かりにくくなることもあるので、ぜひ団体の皆様には、意識しながらコミュニティという言葉を使っていただきたい。

2つ目は、どの団体においても、多世代が参加しながら場を作っていくことをすごく意識されていた。4つの団体で4つの手法で多世代交流を試みていた。しかし、これも「多世代で交流しよう」という言葉は簡単だが、実際やろうとすると非常に難しいことである。本日各団体が発表した事例を参考にさせていただきながら、多世代の参加、交流を果たしながら作りあげて欲しい。

最後に、3つ目だが、まちづくりに向かう主体をどのように形成していくのか、どの団体も悩みどころだったのではないかなと感じている。

多世代がまちづくりに参加すれば、後継者が自然と育って欲しいと感じるだろうが、必ずしも自然と育つとは限らない。高齢化や人が抜けてしまい、活動が続けられない団体が多くいる中で、4つの団体から「辞める」という言葉を聞かれなかったことは素晴らしい。

そういった中で、それぞれがまちづくりの主体であると捉えながら、まちづくりに向かう姿勢は、今こちらに集まっている皆様が、まちづくりのリーダーとして引っ張っていく立場なのではないかなと思っている。

委員の方から、色々と厳しい質問が飛んだり、無理なお願いもさせていただいたこともあるかと思うが、向き合える部分は向き合ってください、今後の活動に活かしていただきたい。

まちづくりは本人たちが楽しみながらではないと継続性が生まれないので、楽しみながら無理せず続けることを意識しながら取り組んでいただきたい。